

日時：2010年9月11日（土）10時～13時30分

場所：丸ビル10F 一ツ橋大学院商学研究科

参加者：常盤先生、片平先生、古川先生ほか13名

1. 常盤先生語録

物心両方のゴミを捨てよう

成功体験を捨てよう

・世の中は過剰、過多、余剰になっていないか。この過剰、過多、余剰というゴミに拘束されているのではないか。企業は生き物であり、新陳代謝が必要。そのためには、捨てる、忘れることも肝要と考えるといいのではないか。

・捨てる、忘れることにより新たなスタート、つまり新しい発想が生まれる。

・なぜ捨てられないのか。捨てる戦略がないのでは。取捨選択には物差しが必要。物差しとは経営の理念、社是、社訓。このものさしを使って捨てる。つまり省察の仕組みを入れる。

・変化とは混在している必要、不必要を振り分けること。捨てることが推進力になり、必要なものが入る。

・イノベーションも同じ。捨てること、忘れることから始まるのではないか。これは製品開発、組織、プロセスのイノベーションも同じである。

・ 未来は過去の泥の中にある。泥の中からはすの花が咲く。

・ 満は欠けるのはじめなり。

2. 客家に見る民族の知恵（松永さん）

- ・ 客家の家族主義
- ・ 老若混同でみんな育てる
- ・ 教育を重んじるのは客家の伝統。成功者の役割
- ・ 客家の食卓
- ・ 健康長寿

- ・ 客家の家族主義
- ・ 問題は話し合いで決める
- ・ 客家の文化と教え
- ・ 強力なネットワークを構築

議論

- ・ 客家から学ぶ
 - ・ 成功した人が人を育てる
 - ・ 教育の仕組みが整っている
 - ・ 例えば、上から下へと教える仕組み。問題は議論で解決する
 - ・ 客家は勝たなくても、負けない
 - ・ 食も大切
 - ・ 客家は血縁であるが、ネットワークを後天的に獲得するにはどうすればいいのか
 - ・ 日本人にはこのようなネットワークが作れるか
- ・ 日本を考える
 - ・ はやぶさは子供に夢を与えた。象徴的なことから人が育つ。
 - ・ モノには力がある。モノには心がある。
 - ・ モノと心が一体になって魂が入る。
 - ・ つまり、モノに愛情が込められているかどうかということが本質（例えば、ジャパネット高田の売り方）
 - ・ モノと人は語り合う（西田幾多郎）
 - ・ 人の思いでもモノはモノでなくなる
 - ・ モノが人に働きかけ、人がモノに働きかける。受動と能動の繰り返し。これにより会社が変わる。
 - ・ モノものづくりはチームでなしえる。これが喜びとなる。雰囲気作りが大切。

3. B級グルメについて（白井さん）

配布資料参照

記録 昌子 久仁子